

中学校社会科地理的分野における「参加型学習」の導入の試み —世界の諸地域・アジア州を中心として—

An Implementation of "Participatory Education" in the Field of Junior High School Social Studies (Geography): Concerning the Study of Various Global Regions with a Focus on Asia

中澤 純一*

1. はじめに

2012（平成 24）年度から、新学習指導要領に基づく新教育課程が中学校において完全実施された。主要教科（国語・理科・数学・社会・外国語）の授業時数が増加し、それに伴い教科書で扱う内容や量が格段に増えたことは周知の事実である。従って、学習指導要領の改訂により社会科においても各学年への配当時間は1学年では105単位時間、2学年でも105単位時間と従来とは変化がみられないが、3学年においては140単位時間と大幅な増加がみられた。つまり、学習指導要領改訂前は各学年を単位数で示すと、どの学年においても3単位だった。しかし、今年度から1・2学年は共に3単位と従来と変わらないが、3学年は4単位であり1単位増加したことになる。授業時数に換算すると35単位時間増えたことになる。

中学校社会科を通し地理・歴史・公民の3分野の履修に関しては、学習指導要領の「第2章 第2節 社会」の「第3章指導計画の作成と内容の取り扱い」の1の(2)において、各分野の履修においては、第1、2学年を通じて地理的分野と歴史的分野を並行して学習させることを原則とし、第3学年において歴史的分野及び公民的分野を学習させること。各分野に配当する授業時数は、地理的分野120単位時間、歴史的分野130単位時間、公民的分野100単位時間とすること。これらの点に留意し、各学校で創意工夫して適切な指導計画を作成すること¹⁾、との規定がある。

さらに、歴史的分野が地理的分野と比較し、10単位時間多い。これは、1・2学年通じて地理的分野を120単位時間履修させ、歴史的分野については1・2学年あわせて90単位時間。そして、3学年の最初に残りの40単位時間履修させる。よって、1・2学年で履修した90単位時間と3学年の40単位時間をあわせると、130単位時間となる。従来の学習指導要領では1・2学年で地理・歴史的分野を修了し3学年では公民的分野のみを履修していた。この地理・歴史的分野の単位時間の履修配当は、改訂前には見られなかったことであり、画期的な改訂だといえる。だからこそ配当時間を考慮し、各学校で授業内容

* 浜松学院中学校・高等学校（社会科教育、国際理解教育、生涯学習）

を精選し創意工夫して指導計画を作成する必要がある。

今回の中学校社会科学習指導要領の改訂に当たって着目する点は、履修配当の時間割り当てだけではない。つまり、基礎的・基本的な知識・技能の習得と同時に、習得した知識・技能を活用して課題を解決していくために必要な思考力・判断力・表現力を育むことを重視していることである。これらの力は、社会的事象や課題を単に知識として習得するのではなく、それらの背景を生徒自ら考え、自分なりの意見や考えを持ち、言語活動の充実を図りながら社会への参加を図り、参画を促すことが求められる。故に、これらの力を習得させるためには教師の指導とともに調べ学習や話し合い学習など生徒が主体的に取り組む学習を取り入れた多様な学習形態を取り入れた指導計画を作成することが肝要である。

すでに新学習指導要領に沿った教科書を用いた授業が始まっている。特に、地理的分野において、大幅な内容の改訂があったという声を教育現場では耳にする。地理学習は、中学校社会科の中で、歴史・公民的分野とは異なる面がみられる。つまり、歴史や公民的分野に比べ、図や表、地図の読み取り・作図などといった技能が求められているからである。しかし、ただ単に機械的に生徒が図や表を読み、数値の大小にとらわれたり、地図から地域や山脈・河川・土地の起伏や利用などといった地形を調べるといった授業形態では、暗記重視や知識詰め込み型の授業に陥る傾向にある。図や表の数値の背後にある事象、地域や地形の位置を確認するだけでなく、そこに暮らす人々の生活や環境について多角的・多面的に考察してこそ、地理的な技能を習得したといえるのではないだろうか。

そこで、本稿では生徒が主体的に取り組む学習の形態の一つとして参加型学習に着目し、さらには、地理的な技能を向上させるための一つの手法として参加型学習を導入することにした。参加型学習は、板書と教師の説明が中心となる一斉授業や知識注入型の授業とは対称的であり、生徒自らの知識や体験を持って積極的に関わる学習スタイルである。本稿の「2 参加型学習の考え方 (1) 参加型学習の特徴」でも示すように、参加型学習を中学校社会科で導入している例はあまりみられない。そこで、中学校社会科地理的分野に大変効果的な学習活動の一つであると推察される参加型学習に焦点をあて、単元モデルを構想し、実践を試みた。参加型学習を地理的分野に導入した授業実践を明らかにすることによって、どんな問題点がみられるのか、授業構想を考える際、どのような点に配慮しなければならないのかを考察する。

2. 参加型学習の考え方

(1) 参加型学習の特徴

Benesse 教育研究開発センターによる中学校の学習指導要領に関する実態調査報告書 2012 の中で、社会科における学習活動に関して次のように報告がされている。「社会科の授業の中で、「図や表の読み取り」「地図の活用」「ワークシートの活用」を 78%の教員が 4 割以上の授業で行っている。2008 年度と比較すると、「グループでの話し合い」や「自

分の意見の発表」などの言語活動を取り入れた授業を全体の4割以上で行っている割合が、2008年度の30.0%から2012年度は36.7%に増えている²⁾とある。さらに、学習活動の形態に挙げられているものとして、図や表の読み取り、地図帳の活用、ワークシートの活用、新聞の活用、年表の活用であり、この調査結果では参加型学習の活用がみあたらない。これは、社会科の学習活動の一貫として参加型学習があまり活用されていないと推察される。そこで、筆者は参加型学習を取り入れた社会科地理的分野の授業実践を推進する上で、参加型学習の特徴を明らかにしておくことが肝要であると考えた。

参加型学習とは「世界各地で開発された、学習者の参加を大切にする学習・教育の方法論を指し、学習者が主人公となって能動的に参加するスタイルを重視する学習³⁾」である。つまり、参加型学習は、誰もが創造的で斬新なアイデアを考え、発言し、共有することができる効果的な学習方法の一つである。さらに、自分の考えを明確にすることで、新たな考えが生まれ自己を発見したりすることができる。これらを、スムーズに行うツールとして様々な手法があるが、まずはなぜ参加型の手法があるのか、はままつ国際理解教育ネット第3回ファシリテーター養成リレー講座のレジメ⁴⁾を参考に次の点が考えられた。まず、より多様な視点からクリエイティブに話し合うことができる点である。次に、多種多様な考え方をを持った人々が、共通の枠組みの中で話し合うことができる。第三に、一つのテーマについて複数で分析することによって、発見や共通理解を図ることができる。第四に、話し合った事柄が成果物として視覚化され、共有しやすくなる。最後に、個人の考えや、グループで考えたプロセスが視覚的に残り、参加者の満足感や達成感を得ることができる。以上の5点が挙げられた。

参加型学習の手法では、様々なアクティビティを組み合わせたワークショップ形式で行われることが多い。アクティビティとは、はじめから事実や答えを教えるのではなく、学習者が自ら考え、気づく工夫のある教材のことであり、これを参加型教材という。また、「アクティビティ＝参加型教材」とは、目的＋内容＋手法のことで、学習者が「課題について知り・考え・気づくために＝目的」、「社会的事柄や情報＝内容」を、「課題解決の方法（枠組み）を提供し、それに当てはめて考えてみる＝手法」、学習者の学びを促進する助けとなる教材のことを示す。

（2）参加型学習の効果と手法

参加型学習は、アイデアを考えたり、育てたりすることができる効果的な学習方法であることは、前述にて明らかである。さらに、自分の考え方をより明確にするとともに、新たな自己を発見したり、創造的なアイデアが生まれたりするのも参加型学習が優れている点である。そこで、廣瀬隆人・澤田実・林義樹は「参加型学習の様々な効果⁵⁾」を「発展性のある学習」「自信をつける」「自分を大切にする」「コミュニケーション能力を高める」「参加の楽しさを味わう」「自分自身の経験の意味を学ぶ」の6点を挙げている。

発展性のある学習とは、共同作業や討論などを通して、相互に学び合うことによって、学習課題を発見することができることである。自信をつけるとは、話し合うことによって、今まで気づけなかった自分を認識したり、自分の考えが検証される。このプロセスを経ることによって、自分の考えや輪郭がはっきりし、そのことが自信につながることである。自分を大切にすると、自らを肯定的に捉えることができる者は、他者に対しても肯定的な視点で捉えることができることである。コミュニケーション能力を高めるとは、自分の気持ちを表現できるようになることが、他の人々の気持ちを思いやるための手がかりを与え、公正や正義についての理解を深めることである。参加の楽しさを味わうとは、「自分が役に立っている」「みんなから必要とされている」という感覚は大切なものであり、社会参加の要因の一つである。自分自身の経験の意味を学ぶとは、「誰もが、他者とわかちあうことができる価値ある経験、体験、歴史を豊富に持っている」という事実を知ることは、ものごとを肯定的に考えるために大切な要素である。参加型学習はこうした経験を語り合うことで、その一部を共有することができることである。

これらの参加型学習の効果を最大限に引き出すためにも、目的や内容に応じて参加型学習の手法を使い分けることが重要である。そこで、参加型学習で用いられる手法をさまざま国際理解教育ネットが作成した参加型学習の手法アラカルト⁶⁾、を基に代表例を表1に示す。

表1 参加型学習の手法の説明とねらい

手法	説明とねらい
因果関係図	目に見える現象の裏にある原因を書き出し、その関係性を可視化する図のことである。ある事柄に関して、何が原因か、そこからどんなことにつながっているのかを、模造紙に派生させて書き出していく。
ウェビング法	自分の頭の中にある事柄やイメージを連想し、そこからどんなことにつながるのか可視化する図のことである。ウェビング法とは、模造紙に派生させて書き出していくことから、クモの巣に例えられこのような名称がついたと言われている。
フォトランゲージ	写真や絵を用いて参加者に提示し、それらから読み取れるものや事実、写真や絵の裏側にある背景を想像し、共感的理解を促す手法のことである。
切り抜きフォトランゲージ	フォトランゲージの応用である。写真や絵の一部を参加者に提示し、それらから連想される場面を考え、絵として描き足していく。写真や絵の裏側にある背景を想像し、共感的理解を促すのに有効的な手法である。

中学校社会科地理的分野における「参加型学習」の導入の試み—世界の諸地域・アジア州を中心として—

ブレインストーミング	あるテーマの概念について、参加者でたくさんの意見やアイデアを出しあい、大筋で全体像をつかむための手法である。他の参加者が何を考えているのか、自分と共通する点や違う点はどこか知るのが効果的である。
カードしく分類法 (K J法)	まとめるのに困難に見える複数の多様な意見を、類似性や共通性のあるもの視点からグループごとにまとめ、これを繰り返すことで新たなアイデアや意味を発見するする手法のことである。
優先順位づけ (ランキング)	ある課題について多様なアイデアを考え、優先事項順にランキングする手法のこと。ダイヤモンドランキング、ピラミッドランキングが例として挙げられる。
力の分析	実際に目標を達成するための行動を選択するとき効果的である。どのような行動がなぜ有効なのか、目標を達成するためにできること、目標達成を阻むものとを両側面から考える手法である。模造紙の中心部に大きな矢印を描く。矢印の左側には、課題解決に役立つ行動、有効に働く力、などを簡条書きで上向矢印に沿って書き込む。矢印の右側には、課題解決や目標達成を阻む行動、じゃまする力や妨げとなる力や要因を上向矢印に沿って書き込む。
ベストシール	会場内（教室）にいる多くの参加者の興味関心を把握したり、各自の優先順位を考える際、有効的な手法である。参加者やグループで出した意見を全てマス目にした模造紙に書き出す。参加者には、シールを3～5枚ほど配り、各自が最も重要だと思う意見の欄にシールを貼る。
対批表	二つのものを並べ合わせて、違いやそれぞれの特性を比べることにより、ものごとの特徴を捉えるのに有効的な手法のこと。
ロールプレイ	問題を含む状況について、そこに関わる人々になりきり会話や態度で表現する。異なる立場に立つことを通じて様々な立場の人の気持ちを理解し課題についての理解を深める。合意形成や他者受容などの能力を高めるためのトレーニングとしても有効的な手法である。各グループに役柄カード又はシナリオを配り、グループ内で役割を決める。参加者は登場人物になりきり、役割カード又はシナリオを読む。ロールプレイが終了したら、意見を出し合い、合意形成をめざして話し合う。

3. 地理的分野の内容構成の変化と参加型学習を導入する意義

(1) 地理的分野の内容構成の変化

学習指導要領の改訂に伴い、地理的分野の内容構成に大幅な改訂がみられた。特に、世界に関する学習内容の改訂には目を見張るものがある。遠藤孝彦は「地理的分野は、昭和22年度版のような世界各州での地誌学習から世界の諸地域学習として観点ごとに地域を学習する方式へと変化していった。その後平成期に、2、3カ国の事例地域を学習させる方式に変化した。平成20年度版で各州を対象とした動態地誌学習へと変わってきている」⁷⁾と述べている。

特に、地理的分野の内容構成は表2が示すように、旧学習指導要領(1998年)では、(1)世界と日本の地域構成、(2)地域の規模に応じた調査、(3)世界と比べて見た日本の3つの項目から構成されていたが、今回の学習指導要領では(1)世界の様々な地域、(2)日本の様々な地域という2つの項目から成っている。1998年の学習指導要領で示された内容構成は、遠藤が示しているように世界の国や地域を選択的・限定的に詳しく取り扱うという地域研究型をとっていた。

だから、戦後から行われてきた地理的分野の内容構成は、日本と世界の様々な地域を、地域ごとに網羅的に学ぶ学習スタイルであったため、旧学習指導要領の改訂では大きな転換期を迎え教育現場でも内容の取り扱いに苦慮したのである。

では、今回の学習指導要領の改訂は、前述の内容構成に回帰したのだろうか。小原友行・永田忠道は「この度の新たな地理的分野の内容構成をよく見ると、実は伝統的な地誌スタイルと、前次の地域研究スタイルの有効な部分をうまく織り交ぜながら編成されていることに気付かされる。すなわち、地誌スタイルの有効性とは、なじみ深い日本や世界の諸地域という地誌内容に即したカリキュラム編成を採用した点であり、地域研究スタイルのそれとは地域を網羅的にではなく焦点を絞って分析的に考察していこうとする手法である」⁸⁾と論じている。つまり、州ごとに様々な側面から地域の特色を大観し、その上で州や地域の特色となる点に主題を設けて理解することにある。

その結果、一方的により多くの情報や知識を教師が生徒に教授するのではなく、生徒が州や地域の特色ある事象を身近に感じ、様々な他地域の事象と有機的に関連づけ、世界の地理的認識を深めていくことが重要な課題となった。これらを踏まえると、教育現場において新しいスタイルで地理的分野の単元プランや教授法を考えることが要求される。

そこで、筆者は世界の諸地域のなかでも、とりわけアジア州に着目した。そして、参加型学習を導入した単元モデルに焦点をあてた授業構想を熟考し、授業実践を試みた。

表2 新旧学習指導要領における地理的分野の内容構成比較

新学習指導要領 (2008年)	(1) 世界の様々な地域 ア 世界の地域構成 イ 世界各国の人々の生活と環境 ウ 世界の諸地域 エ 世界の様々な地域の調査 (2) 日本の様々な地域 ア 日本の地域構成 イ 世界と比べた日本の地域的特色 ウ 日本の諸地域 エ 身近な地域の調査
旧学習指導要領 (1998年)	(1) 世界と日本の地域構成 ア 世界の地域構成 イ 日本の地域構成 (2) 地域の規模に応じた調査 ア 身近な地域 イ 都道府県 ウ 世界の国々 (3) 世界と比べて見た日本 ア 様々な面からとらえた日本 イ 様々な特色を関連付けて見た日本

(2) 参加型学習を導入する意義

本稿の3の(1)の表2の新学習指導要領(1)ウ 世界の諸地域の学習においては、今後はアジア・ヨーロッパ・アフリカ・北アメリカ・南アメリカ・オセアニアの世界の6つの州の地域的特色を学習することに視点が置かれている。内容の取り扱いとして「州ごとにさまざまな面から地域的特色を大観させ、その上で主題を設けて地域的特色を理解させるようにすること」⁹⁾とある。従って、それぞれの州の地域的特色を理解させるには、基礎的・基本的な知識を習得する学習が基盤となる。そして、身に付けた基礎的・基本的な知識を活用して、生徒の生活と結びつく地理的事象を取り上げた主題を設定し、更に生徒が主体的に取り組む学習形態を教師が創意工夫して行うことが要である。しかし、これまでの社会科における授業のスタイルとして多く見られるものとして、郡司修一・西内裕一は「「これまでの伝統的な「知識注入型授業」は、教師の説明と教科書、黒板、鉛筆、ノートに象徴されるように、静的で、五感の中でも聴覚と視覚を主に働かせ、言語に偏った学習という特徴がある」¹⁰⁾、と指摘している。

しかし、参加型学習を授業構成に取り入れることによって、生徒が五感や体全体を使った動的な学習活動が展開され、生徒の感覚・実感、感性を刺激し、結果として思考力・判断力・表現力の育成が多いに期待できる。

そこで、特に世界の諸地域におけるアジア州に焦点を絞り、参加型学習を導入した単元モデルを構想し、実践を試みた。アジア州を題材に設定した理由は、我が国と距離的にも近く、経済的にも文化的にも強く結びついているからである。また、本校の生徒を対象に調査すると、約80%以上の生徒がアジア諸国を開発途上国と捉えており、貧困、人口増加、児童労働、教育格差、栄養不足、国際協力などという意見を挙げる生徒が多かった。これらの情報の大半は、新聞、テレビ、インターネット、書籍や雑誌などのマスメディアの影響が伺われる。これらの生徒の意見は州内の個別の国や小地域の一部に偏った地域の特色と推測できる。アジア州の国々といっても、様々な国が存在する。経済的側面をみると、東アジアや東南アジアに位置する、大韓民国やシンガポールでは、工業の発達が著しい。これらの国々は、組み立てや加工といった簡単な雑貨や衣類などを生産し外国へ輸出する傾向にあった。しかし、近年では技術力を高め、電気機械などを輸出品の中心とする工業化が進んでいる。一方、タイやマレーシア、ベトナムでは、近年工業が発展し、工業団地をつくって外国企業を誘致し、工業化を進めている。さらに、経済的側面だけでなく、アジアの国々の文化や習慣、宗教の側面も考慮すれば、アジア州は多様であり、生徒との興味・関心を喚起しやすい題材である。

以上のことを鑑みて、世界の諸地域におけるアジア州を中心に参加型学習の導入を試み、実践を行った。

4. 参加型学習を取り入れた授業実践

(1) 単元の構想

まず、単元構想をするにあたって、アジア州に関する年間計画が教科書会社においてどのような取り扱いをし、差異があるのか検討することにした。

表3 アジア州における教科書会社3社の年間指導計画案対比

	A 注1	B 注2	C 注3
1	広い範囲に及ぶアジア	アジア州をながめて①	アジア州をながめて
	アジアの範囲及び地域区分、アジアの地形と気候の特色について理解する。	アジアの自然について、雨温図などの資料から概観する。アジアの人口について、統計、分布図などの資料から概観し、考察する。	アジア州の歴史と自然環境を大観し、アジアを構成する主な国々の位置と名称を理解し、地勢図から読み取ることができる。

中学校社会科地理的分野における「参加型学習」の導入の試み—世界の諸地域・アジア州を中心として—

2	多様な文化と集中する人口	アジア州をながめて②	巨大な人口と多様な民族
	アジア州の多様な文化と民族構成及び人口分布について、宗教や自然とのかかわりを考える。	アジアの文化や産業について、写真、グラフなどの資料から読み取る。	中国を例に、多くの人口や多様な民族と、それらを支える農業生産の特色を理解し、考察し表現する。
3	降水量と関係が深いアジアの農業	経済成長がいちじるしい中国とインド	「世界の工場」の出現
	アジア州の農業の特色について、降水量との関連を考え、基本的事項を理解する。	中国とインドの急速な工業化の様子を、本文や資料から読み取る。また、急速な工業化による格差の拡大などの課題について理解し、その対応策を考察する。	中国を例に、工業化と経済発展が進み、それによって人々の生活が変化していることを理解する。また、経済発展とその背景、人々の生活との関係について考え、表現する。
4	工業化が進むアジア	急速に変わる東南アジア	調和のとれた社会へ向けて
	アジア州の特色を、外国企業の進出との関連から考える。	東南アジア諸国の産業についての関心を持つ。東南アジア諸国の都市と農村の変化の実態を、写真、統計資料などから考察する。	中国を例に、経済発展による地域格差の拡大や環境問題の深刻化を理解する。地域の開発とそれによって引き起こされる社会問題や環境問題との関係について考え、表現する。
5	追究：身近なものからみたアジア	多様な民族と経済成長	工業化と大都市の成長
		写真や分布図などから、西アジアや中央アジアの国々の特色を読み取り、アジア州全体の多様性を理解する。	韓国を例に、工業化にともない、経済発展と都市化が進むことを理解する。大都市が成長することによって、どのような問題が引き起こされているのか考え、表現する。
6	身のまわりにあるものや我が国の文化からみたアジアとのかかわりを調べ、我が国とアジアの地域の結びつ		変わる産業と貿易
			東南アジアを例に、多様な宗教や民族、産業の特徴とその変化を理解する。工業

	きが強くなっていることを追究する。		化が進んだ背景や人々の生活の変化について考え、表現する。
7			世界を動かす石油資源 西アジアを例に、自然環境と人々の暮らしや、石油資源に依存した経済の特色を理解する。石油資源が世界に対する影響力をもち、人々の伝統的な暮らしが変化していることを考え、表現する。
8			特設 発展途上国の都市と貧困 フィリピンを例に、経済発展によって発生する社会問題について理解する。発展途上国に共通してみられる都市問題のしくみについて考え、表現する。

注1 帝国書院 (<http://www.teikokushoin.co.jp>) 社会科中学生の地理世界のすがたと日本の国土年間指導計画案 平成24年度以降用を参考に筆者が修整

注2 東京書籍 (<http://www.tokyo-shoseki.co.jp>) 地理的分野指導計画表・評価基準を参考に筆者が修整

注3 教育出版 (<http://www.kyoiku-shuppan.co.jp>) 平成24年度版『中学社会 地理 地域に学ぶ』年間学習計画・評価計画(案)を参考に筆者が修整

表3を眺めると、単元の導入にあたる1時限目ではアジア州の自然環境や地域的特色を大観し追究することに主眼をおいていることが分かる。また、人口や工業、農業について概観し、それぞれの基礎的・基本的な知識を身に付けさせる学習内容を意識している。一方、前述の3の(1)でも触れているが、その学習内容をみても分かるように、特定の国に特化して学習を進めていくのではなく、様々な国々を取り上げて学習内容を構成していることに特色がある。つまり、州ごとに様々な側面から地域の特色を大観し、その上で州や地域の特色となる点に主題を設けて理解することにあることから、マレーシア、中国、インド、タイ、韓国、フィリピン、サウジアラビアと言ったように、アジア州に位置する様々な国を取り上げていることが分かる。

これらの視点を踏まえ、以下の表4の単元構想を提案する。

表4 参加型学習を取り入れた『世界の諸地域・アジア州』における単元構想

時	学習項目	学習のねらい	学習活動
1	アジア州のすがた	アジア州の自然環境と地域的特色を大観し、アジアを構成する主な国の位置を確認する。	フォトランゲージを用いてアジアの国々に対する興味を高める。【参加型】 地図を用いて国々の位置と自然環境を読み取る【読図】
2	集中する人口と多様な民族	中国、マレーシアを例とし、アジア州の多様な文化、民族構成及び人口分布、地域や民族による所得格差について考える。	中国・マレーシアのウソ・ホントクイズ！ちがうのはどれ？【参加型】 日本、中国、マレーシアの対比表【参加型】・【統計資料】 ロールプレイを用いた地域格差・民族格差【参加型】
3	アジアの農業と食文化	中国、バングラデシュを例とし、アジア州の農業の特色について理解し、地域による食文化の違いや共通点について考える。	バングラデシュB I N G O【参加型】 中国一周くいだおれの旅！【参加型】 降水量と農業の関係性を読み取る【読図】
4	急速に発展するアジアの工業	中国、インドを例とし、アジア州の工業の特色と、工業化による格差の拡大などの課題について理解し、考察する。	生活で身近な外国製品【参加型】 ランキングで考える元気な地球のつくり方【統計資料】
5 ・ 6	発展 開発途上国の現状と課題	バングラデシュを例とし、アジア州における開発途上国の現状を理解し、私たちができる行動指針を考察する。	ストリートチルドレンとは【参加型】 貧困の輪【参加型】 フェアトレードビーズでストラップ【ものづくり】

(2) 授業実践を通しての考察

本校の2学年30名を対象に授業実践を行った。実施期間は平成24年12月である。本来ならば、世界の諸地域は1学年2学期に授業を行うことが望ましい。しかし、学習指導要領の移行期間に該当したため、歴史的分野を1学年と2学年の2学期に履修し、地理的分野を2学年に学習する形式をとったために実施期間にずれが生じた。単元のねらいは、アジア州の地域を大観し、その上での課題を参加型学習を中心として多面的・多角的に理解することである。

次に、授業実践の実際と考察を参加型学習の部分に特化して論じる。

1時限目は、アジア州を学習する導入としてフォトランゲージを行った。中国（上海）、バングラデシュ（ダッカ）、イラン（エスファハーン）の街並みの写真を提示し、その写真から読み取れるものをグループ単位で話し合わせた。また、その写真がどの国を示すのか予想させた。

その結果、中国の写真に関しては、高層ビルが立ち並んでいる、アメリカ、イギリスなどの大都市である、湾岸都市であるなどと言った意見がみられた。なお、中国の写真だと予想したグループは極めて少なく、アメリカ、イギリス、フランスといった欧米諸国を予想したものが多かった。バングラデシュに関しては、リゾート地である、小舟がたくさん浮かんでいる、ヨーロッパの港町であるなどと言った意見が挙げられた。また、国名に関しては、バングラデシュと答えたグループはなかった。イタリア、スペイン、フランス、トルコ、中国、韓国などヨーロッパやアジア地域における国々を予想したものが多かった。イランに関しては、モスクがある、煉瓦づくりの宮殿、エジプトみたいである、インドの王宮などと言った意見が出された。また、国名については、インド、エジプトといった国を予想したグループが圧倒的に多かった。

これらは、意図的にその国を生徒が容易に予想できるものではない写真を選択し提示したからである。つまり、断片的な知識でその写真の国を判断するステレオタイプの見方を防ぐことがねらいだった。このように、生徒が挙げた意見を眺めると、フォトランゲージを用いることでアジアの国々に対する興味・関心呼び起こし、授業導入の教材としては一定の効果があったと判断する。

2時限目は、3つの参加型学習を取り入れたアクティビティを実践した。中国・マレーシアのウソ・ホントクイズ!ちがうのはどれ?では、1枚のカードに対し1つのクイズが書かれたものをグループ毎に配布し、クイズ毎にどれがウソか選択肢から選ぶ形式をとった。

中国に関する質問事項は、例えば、中国の国旗「五星紅旗」。大きい星は共産党を表す。あとの四つはどれか。(選択肢:A 資本家、B 農民、C 労働者、D 漁民)や中国にはたくさんの少数民族がいる。ちがうものはどれか。(選択肢:A リス族、B ワニ族、D ヌー族、D ミャオ族)などである。一方、マレーシアに関する質問事項は、マレーシアの公

中学校社会科地理的分野における「参加型学習」の導入の試み—世界の諸地域・アジア州を中心として—

立小学校は、マレー語、タミル語、中国語の学校を選ぶことができる。(選択肢：A ウソ、B ホント) やマレーシアには世界遺産登録はいくつある。(選択肢：A 1つ、B 2つ、C 3つ、D 4つ) などである。

これらの質問項目を選択するにあたり、小単元のねらいにもあるように文化、民族、人口に関するものを意図的に抽出した。その結果、生徒はただ問題を解くのではなく、グループ内で話し合い答えを導くことから自分の考えを発言し、他者の意見を聞くといった傾聴のスキルも身に付けることができた。なお、基礎的・基本的な知識を習得する点を配慮し、答え合わせをする際、ただ単に答えを伝えるのではなく、その国に関する文化、民族、人口の背景や詳細を交えながら説明した。

次に、日本、中国、マレーシアの対比表を行った。日本、中国、マレーシアを数値的に比較するために、A3サイズの用紙を2枚重ね合わせた対比表に、グループ内で協力し地図帳の統計資料から調べまとめる作業を行った。項目は、首都名、人口、面積、人口密度、おもな宗教、おもな言語を設定した。また、対比表を完成した後、グループ内で3カ国を比較しどのような傾向がみられるか討論した。

その結果、生徒は人口に関して、中国の人口は日本の約10倍であり、また、マレーシアの60倍であり、圧倒的に中国の人口が多いことを理解した。人口密度に関しては、日本もマレーシアも面積ではさほど変わりはないが、人口密度は日本の方が圧倒的に高い。おもな宗教に関しては、3カ国ともに仏教を信仰しているが、日本は神道、中国は儒教や道教、マレーシアはイスラム教と言うように国ごとに特色があるなどといった意見が挙げられた。以上のことから、次のことが見出された。つまり、統計資料を読み取る際には、多くの授業では個人単位で読み取り、表にまとめたり、発表するといった形式を採用するケースが多い。しかし、参加型学習として対比表を用いることで、消極的な生徒もグループ活動に積極的に参画していく姿がみられた。また、一人で数値を読み解くよりも複数で行うことで、積極的な意見や新たな気づきが促された。

2時限目の所得格差について考えるアクティビティとして、公益財団法人愛知県国際交流協会が作成した国際理解教育教材『世界の国を知る 世界の国から学ぶ わたしたちの地球と未来 マレーシア』¹⁾を参考に「地域格差・民族格差を考える」を行った。

「地域格差・民族格差を考える」とは、1つの国の中にも様々な地域、色々な暮らしがあり、どのような地域の人々も格差を感じることなく、暮らしやすい社会をつくるためにはどうすれば良いのかロールプレイを用いたアクティビティである。

その事例の一つとして、マレーシアを取り上げている。ロールプレイによって、生徒はインド系住民、中華系住民、マレー系住民をそれぞれ擬似体験した結果、生徒からマレーシアには地域や民族によって所得の格差がある、マレー系の住民は元々住んでいるにも関わらず貧しい生活に苦しんでいて不平等である等といった意見が出された。また、格差の拡大に向けた取り組みの事例として、マレーシア政府の取り組み、JICA（独立行政法人国

際協力機構)の取り組みを紹介した。ロールプレイを用いることによって、マレーシアの各民族の立場に立つことを通じて、人々の気持ちを少しでも理解し共感し、2つの課題について理解を深める手立てとなった。

3時限目は、バングラデシュBINGOⁱⁱ⁾を授業の導入教材として行った。バングラデシュに関する記載は、教科書には数少なく生徒には馴染みの薄い国である。そこで、バングラデシュについての大枠を掴むために、筆者が独自に作成したものを使用した。

ビンゴ表のマスに、国旗、食文化、民族衣装、建物、農産物などに関して提示された質問の解答を3択で選ぶ形式のものである。特に本授業で農業と食文化について取り上げているため、バングラデシュで食事をする時、基本的には何を使うか。(選択肢：A 左手、B フォークとスプーン、C 右手)、バングラデシュの主食は何か。(選択肢：A ナン、B 米、C パン)といった質問項目を取り入れた。

ビンゴ形式といった参加型学習の手法を用いた結果、生徒はバングラデシュについて興味深く学ぶことができ、写真を提示しながら答え合わせをしたため、視覚化され実感として捉えることができた。

次に中国を例に、自然環境と農業の関係性、各地方の地域的特色と気候の関係を読み取ることを行ないとし、公益財団法人愛知県国際交流協会が作成した国際理解教育教材『世界の国を知る 世界の国から学ぶ わたしたちの地球と未来 中華人民共和国』ⁱⁱⁱ⁾を参考に「中国一周 くだおれの旅!」を行った。

「中国一周くだおれの旅!」とは、広大な国である中国をすごろくといった擬似体験を通し、様々な地形や気候を確認しながら有名な都市の特徴や中国四大料理(四川料理、北京料理、上海料理、広東料理)について理解するものである。この結果、東北、華北、華中、華南、西方の各地方の地域的特色と気候の関係性を読み取り、地域による気候や地形の違いから中華料理にも違いがあることを理解した。一例として挙げるならば、北京は寒く乾燥した地域なので、油っこく、濃い味付けの料理が多い。小麦の産地なので小麦を原料とする餃子、肉まん、麺類が発達していることを学んだ。

4時限目は、授業の導入としてブレンストーミングを活用し、生徒の生活の中で身近な外国製品をグループ単位で挙げ、模造紙に記入した。挙げられた意見の多くには、衣服→中国・ベトナム・バングラデシュ、文房具→中国、家電製品→韓国、野菜→中国、オレンジ→アメリカ、小麦粉→アメリカ、コーン→アメリカ、キムチ→韓国、コーヒー→アフリカ、紅茶→インド、カレーのスパイス→インドなどがみられた。挙げられた製品の生産国を眺めると、中国が多い傾向にあった。その結果、中国をはじめとした外国製品が身の回りに溢れていることを実感した。

5・6時限目は、発展学習の一環として、アジア州に多く存在する開発途上国の現状と課題について取り扱った。1時限目から4時限目の学習内容は、人口、農業、工業といった経済発展がめまぐるしい光の部分に焦点をあてるが多かった。しかし、各授業で若

干ながら触れた陰の部分である開発途上国の現状や私たちができる行動指針を提起した学習活動が少なかった。そこで、国際理教育の視点にまで広げ開発途上国の現状と課題といった単元を独自に設けた。この小単元は、前述の4の(1)の表4を見ても分かるように、取り上げている教科書は少ない。

まず5時限目に、切り抜きフォトランゲージを用いた。はじめに、バングラデシュの首都であるダッカのストリートチルドレンが写った写真の1人の少年の部分を残し、周囲の背景を白抜きにしたものを2人1組となったペアに1枚ずつ配布する。次に、少年の周囲から連想される場面を考えながら、絵として描き足していった。その後、写真の裏側にある背景を2人で話し合いを重ねた。

この結果、ストリートチルドレンの周囲の背景を描くのに場面的な差異はあるものの、少年の背後にある車や大人たちから推測し、大抵の生徒はストリートチルドレンであることに気付いた。さらには、ストリートチルドレンに対し、生徒自身よりも幼い子ども達が路上で生活していることに共感的理解を促した。

第二に、「貧困の輪^{iv)}」を行った。「貧困の輪」とは、貧困の原因を栄養不足、栄養不良、教育問題、能力や技術の未習得、雇用口の不足、収入不足、不健康の7つに仮定した。これらの7つの原因が繋がり合い貧困の原因を生み出すと共に、さらに貧困の現状を悪化させているといったことに気づき、個人の努力だけでは、この悪循環から抜け出すことができないことを理解し考察するアクティビティである。このアクティビティは、グループで貧困の輪を完成させた。グループでまとめた貧困の輪の一例として、貧困→学校に行けない→能力や技術が身に付かない→仕事が見つからない→収入が足りない→栄養が十分にとれない→栄養不足になる→健康を損なう→貧困といった輪が見られた。

この結果、生徒は次のことを学んだ。貧困には様々な原因が連鎖的に関連しており、一つの原因を絶ちきっても根本は解決しない。また、自助努力では解決できないことが多く、他者の支援を仰がなければ解決することが出来ないと知り、国際協力・貢献の必要性を理解し考察した。

6時限目は、5時限目に生徒が気付いた国際協力や国際貢献の視点から課題解決の一つとして、フェアトレードを扱った。ただ、フェアトレードについて知識を深めるのではなく、フェアトレードの材料を使用したストラップづくりの教材を活用した。ねらいは、開発途上国における生産者の労力や製品に対する価格のあり方とフェアトレードに対する理解と知識について実習を通して学ぶことである。ストラップづくりを通し、材料にもインドのビーズやバングラデシュの麻紐を使用したことから、アジア州を学習した生徒自身にとって身近なものであることに気付いた。さらに、時間をかけ苦勞して製作することから、開発途上国における生産者の労力や製品に対する適正な価格について考えを深めることができた。さらには、日常生活の中でフェアトレード製品を利用していこうという意識を持った生徒もあらわれた。故に、生徒の行動変容を促したことが伺われる。

5. おわりに

冒頭で述べたように本論文のねらいは3点である。まず、参加型学習を地理的分野に導入した授業実践を明らかにすること。第二に、学習活動を進めるにあたり、どのような問題点がみられるのか。第三に、授業構想を考える際、どのような点に配慮しなければならないのかを考察することだった。

また、世界の諸地域であるアジア州を題材に設定した理由は、我が国と距離的にも近く、経済的にも文化的にも強く結びついているからであった。一方で、本校の生徒を対象に調査した結果から、アジア諸国を開発途上国と捉えており、日本よりも技術的にも経済的にも遅れているというイメージを持っている生徒が多いことが伺われた。これらのステレオタイプ的な概念を払拭するためにも、アジア諸国の多様な自然環境、工業、農業、人口、民族に主題を念頭に置き、参加型学習を導入した授業展開を行った。

全体を通してみてきたことは、授業毎に参加型学習を取り入れることで、授業の導入教材としての効果的は非常に高かったと思われる。地理的分野では、様々な国を学ぶことが多い。しかし、実際に海外に行ったことのある生徒や、日常的にテレビや書籍などを通して世界について自主的に学んでいる生徒は少ない。だから、教科書や地図、資料集などの図や表、写真等からある特定の国について、教師が提示し簡単に触れるだけでは、生徒がその国々に対してイメージを膨らませ、背景にあることまでを推察するまでには至らない。これでは、地域的特色を学ぶ上で生徒自身が興味関心を促すことが出来ず、学習効果の向上が期待できない。だから、フォトランゲージやビンゴ形式、ブレーンストーミングといった参加型学習の手法は、一つの単元に対して生徒の興味関心を導き出す上でも効果が非常に大きかった。

先にも述べたように、海外経験が少ない生徒にとっては、距離的に近いアジア諸国といっても遠い国のように感じている。知識伝達型の授業形態では、生徒にとって近いという概念形成を促すのはなかなか難しい。そこで、ロールプレイやすごろく、ビンゴ形式といった参加型学習の手法を取り入れ、擬似体験したり興味関心を高めながら授業を進めることで、その国や地域に親近感を抱くことができた。

一方、問題点もみえてきた。今回の中学校社会科学習指導要領の改訂にあたって着目する点は、基礎的・基本的な知識・技能の習得と同時に、習得した知識・技能を活用して課題を解決していくために必要な思考力・判断力・表現力を育むことを重視していることだった。確かに参加型学習を授業に導入することで、習得した知識・技能を活用して課題を解決していくために必要な思考力・判断力・表現力を育む点では一定の効果が得られた。

しかし、参加型学習では基礎的・基本的な知識を生徒に習得させる面では欠けていた。そのため、授業の中では参加型学習だけを用いて進めるのではなく、ワークシートや地図帳を活用し基礎的・基本的な事項を教授するという補足的な学習活動も組み合わせた。つまり、参加型学習が中学校社会科学習指導要領のねらいや学習内容の全てを網羅する訳で

はなく、様々な学習活動と結びつけてこそ大きな効果をもたらすと考える。だから、これらの点に十分に配慮しながら、授業構想を考える必要がある。

今後も、中学社会科地理的分野における参加型学習の実践を積み重ねたい。そして、社会科に特化して、より効果的な参加型学習の導入を検討していきたい。さらには、公民的な分野歴史的な分野においても、参加型学習を実践していく所存である。

【引用文献】

- 1) 文部科学省 『中学校学習指導要領解説 社会編』 日本文教出版 2008年 124-125頁
- 2) Benesse 教育研究開発センター 『中学校の学習指導に関する実態調査報告書 2012 主幹教諭・教務主任/理科教員/社会科教員に対する調査から』 株式会社ベネッセコーポレーション 2012年 26頁
- 3) 郡司修一・西内裕二 『社会科における「参加型学習」の実践的考察』 福島大学教育実践研究紀要第39号 2000年 71頁
- 4) はままつ国際理解教育ネット・公益財団法人浜松国際交流協会（HICE）・独立行政法人国際協力機構中部国際センター（JICA 中部）主催 『第3回国際理解教育ファシリテーター養成リレー講座 第4回ワークショップづくりと実践 参考テキスト』 2012年 3頁
- 5) 廣瀬隆人・澤田実・林義樹 『生涯学習支援者のための参加型学習 ワークショップのすすめ方 「参加」から「参画」へ』 ぎょうせい 2000年 46頁
- 6) 中澤純一 『参加型学習の手法☆アラカルト—だれにでもできる国際理解教育』 はままつ国際理解教育ネット 2012年 2-12頁
- 7) 遠藤孝彦 『中学校社会科における世界の国々の取り上げ』 宮城教育大学国際理解教育研究センター年報 2011年 15頁
- 8) 小原友行・永田忠道 『「思考力・判断力・表現力」をつける 中学地理 授業モデル』 明治図書 2011年 17頁
- 9) 前掲1) 32頁
- 10) 前掲3) 79頁

【参考文献】

- i) 財団法人 『世界の国を知る 世界の国から学ぶ わたしたちの地球と未来 マレーシア』 <http://www2.aia.pref.aichi.jp/topj/indexj.html> 2011年 21-22頁
- ii) 中澤純一 『ものづくりを通して学ぶ国際理解教育の実践～ストラップづくりを通して国際貢献～』 独立行政法人国際協力機構 2011年 10-12頁
- iii) 財団法人 『世界の国を知る 世界の国から学ぶ わたしたちの地球と未来 中華人民共和国』 <http://www2.aia.pref.aichi.jp/topj/indexj.html> 2010年 13-15頁
- iv) 開発教育・国際理解教育アクションプラン研究会 『教室から地球へ 開発教育・国際

理解教育 虎の巻 ～人が育ち、クラスが育ち、社会が育つ～』 東信堂 2006 年
83-84・90・96 頁

【論文を執筆にするにあたり参考とした文献】

- ・ 伊東亮三・中山修一ほか 『社会科における国際理解教育の展開（Ⅱ）』 広島大学教育学部共同研究体制研究紀要 1992 年
- ・ 栗山丈弘 『国際理解教育における「グローバル社会」の教材開発方略に関する一考察 文化女子大学紀要人文・社会科学研究 2011 年
- ・ 井田仁康 『社会科地理的分野におけるアジア学習の検討ー国際理解教育の観点から韓国を例にしてー』 上越教育大学紀要 第11巻 第2号 1992 年
- ・ 財団法人 『世界の国を知る 世界の国から学ぶ わたしたちの地球と未来 ベトナム社会主義共和国』 <http://www2.aia.pref.aichi.jp/topj/indexj.html> 2011 年
- ・ 公益財団法人 『世界の国を知る 世界の国から学ぶ わたしたちの地球と未来 シンガポール共和国』 <http://www2.aia.pref.aichi.jp/topj/indexj.html> 2012 年